

# 保育における子どもの体験（3）

～「人とのかかわり」「ことば」の視点から～

新潟県立大学 人間生活学部 子ども学科 梅田 優子  
永井 裕紀子

## I. 目的

幼児期の教育と小学校教育の接続は重要な課題である。平成29年に告示され平成30年度から施行された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂においても、幼児期の教育と小学校教育の接続を実現していくことがより目指されている状況にある。この接続を考えるにあたっては、両教育の目指すところは共通であるが、その対象年齢の違いから、教育活動のありかたについては違いがあり、お互いがその違いを理解し、尊重しながら、接続の在り方について考えていくこと<sup>i</sup>が求められている。その実現を図るため、今回の改訂に当たっては、幼児期の教育・保育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の記述が加えられた。幼児期の教育において「育みたい資質・能力」は、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の3要素であり、これらが、小学校以降の教育において目指される3要素「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」につながっていくものと、系統性が強く意識された整理がなされた。また「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は10項目として整理され、この10の姿は、『小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう務めるものとする』<sup>ii</sup>とされている。

そして、この「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」は、幼稚園教育要領等の領域ごとに示される「ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、指導を行う際に考慮するもの」<sup>iii</sup>であり、「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうものであること」とされている。

そこで我々は、実際の保育場面で子どもがどのような体験や学びをしているのかを明らかにするために、5歳児クラスを対象として行った観察を行った。まずは5歳児の姿からその体験のありようを明らかにすることが、小学校以降の教育との接続や連携を考えていく際に有効であると考えからである。本稿においては、子どもの「かかわり」と「こと

ば」の視点から、実際の保育における子どもの体験を検討・考察することを目的とする。

## II. 方法

新潟県内 Z 幼稚園における 5 歳児クラス 25 名の保育場面の観察を行った。観察内容はメモと 3 台によるデジタルビデオカメラに記録した。観察終了後、子どもの発話や遊び・活動の状況を文字化し分析資料を作成した。観察は 20XX 年度に原則月 1 回の割合で実施した。本稿では 1 学期の子どもの姿の検討を行う。観察日は 20XX 年 5 月 29 日、6 月 26 日、7 月 11 日となる。観察時間は 8 時 45 分から 14 時 15 分である。観察で得られた録画データは研究目的以外では使用しないこと、発表の際には個人が特定されることのないようにすること等を園及び担任保育者に伝え、調査の実施と研究発表に関する同意を得た。

本稿においては、ある一人の子どもを中心としながら観察・検討を行なっている。対象とした S は、このクラスの担任が、遊びや友達との関わりにおいて詳しくその様子を捉えていきたいと願っていた子どもでもある。S を含むグループの遊びや活動の状況を捉えた 1 学期の事例（5 月～7 月）の保育場面のうち、好きな遊び（自由遊び）の場面における、子どもの「かかわり」体験がどのようなものであるか、そこでの「ことば」の体験や育ちがどのような状況であるかについての検討・考察を行う。

なお、観察園における保育の流れは以下のようになっている。

(例：5 月のある 1 日の保育の流れ)

8：45～10：10 順次登園 好きな遊び

10：10～10：30 片付け・トイレ

10：30～12：00 クラス全体での活動

12：00～13：00 給食準備・給食

13：00～14：00 係活動

14：00～14：20 帰りの会

この園での午前中は、子ども自らが主体的に環境に関わって展開される好きな遊びの時間と、クラス全体での活動の時間がある。年齢によって、また同じ年齢でも時期やその日の状況等に応じて、好きな遊びの時間とクラス全体での活動の時間の比率は変化する。本稿で検討を行うのは下線が引かれている時間帯の事例であり、「事例 5-1」は 5 月の事例の 1 つめであることを表している。

## III. 結果及び考察

### 1. S の他者との「かかわり」体験 ～5 月・6 月、共に遊ぶことの多い A とかかわる姿を中心に～

(1) 何をして遊ぶか伝えようとするが、思いが重ならない

事例5 - 1

朝、保育室の隅の積み木の前で

S、A、Y、C男児4人で何をしようか話している。Y「会社がいい」、S「ゲームセンター」と思いついたことを言う。それに対して「ヤダヤダヤダ」と声上がり「もうゲームやったんじゃないの」などのやりとりがなされる。S「じゃんけんしよう」 A「だってさあ、〇〇組（年中児のクラス名）のときじゃんけんしたでしょう？」。この後、じゃんけんせずにY、Cは近くで積み木を積んで別の遊びをやり始め、Sは製作コーナーへ行く。Aも少しして製作コーナーに合流する。

集まったメンバーには、友達と一緒に遊んでいきたい気持ちがあり、それぞれに思いついたことを言葉にしているが、一つにはまともらずにいる。Sによる「じゃんけん」の提案は、ジャンケンをすることで一つのことを絞ろうとする提案ではあるが、負けてしまった場合には自分のやりたいことはできないことになる。Y、Cは、この後すぐに積み木を組み立て始めている姿からも、やりたいことが明確にあったものと思われた。しかしながら、Y、Cからは自分たちのやりたい遊びに対する思いを言葉にして伝えるということとはなされていない。

このように、自ら環境に関わって遊ぶことのできる「好きな遊びの時間」だからこそ、一緒に遊びたいと思う友達と関わろうとする体験ができる。そしてその際にはこの事例のように、遊びたいことが調整できずに一緒に遊び出せない（遊べない）という体験もすることになる。またその思いを重ね合わせてみる過程で、Sは、じゃんけんという方法でこれからやる遊びを決めてしまえるほど「この遊びをやりたい」という強い思いが持っていない自分の状況と、じゃんけんできずやりたい遊びを決められない友達の思いをSは感じるようになるだろう。

また、やりたいことを言葉でやりとりをしようとする姿はあるが、「会社」とか「ゲームセンター」といった言葉のみであり、何をどのように遊んでいくかといったことを言葉で相手に理解できるように話すことが、この時期では容易ではないことも読み取れる。

（2）自分が遊び始めることで友達が遊びに関心を持つ

事例5 - 2

〈どのカップに入っているか〉

Sは材料置き場に向かいしばらくして、紙コップ2つとプリンプリンの容器のようなプラスチックカップ1つの計3個を手にし、Aに声をかけると最初にいた積み木の前に戻る。

そこで一つのカップの中にペットボトルのふたを入れて伏せ、3つを動かしてどれに入っているかを見る動きを始める。Yがやってきて何をしているか聞かれ、Sはカップを動かしながら、「これさあ、どれに入っているか当てる遊び」とにこやかに答える。Yも笑顔で「そう思ったー」

Sは自分の思いついた遊びを元いた場所（位置）に戻って動きにしていくことで、Sが最初に話していたYが関心を持ち関わってきている。自分のやりたいことが、具体的な物（カップ）や動き（物を入れて伏せて動かす）として表現されることで、周囲の子どもに伝わり、理解されることになっている。

関わっていつているYの方の問いかけは何をしているかの確認をしようとする側面もあるのだろうが、むしろ、実際の関わりの契機としての問いかけであることが、「そう思ったー」というYの返答からも窺える。友達の動きから相手が何をどのように遊ぼうとしているかが伝わることで関心を持たれていることとなっている。

またここでのSは、自分が何をして遊んでいるか（どう遊ぶか）が明確であったことが、迷いなく動き始めた様子からも感じられた。そのためYに聞かれても「どれに入っているか当てる遊び」と自分で遊んでいることを言葉にすることができている。

### (3) 誘いかけてやりとり遊びを楽しむ

#### 事例5-3

Sは「誰が当てるか？」と周囲に呼びかける。Cがカップの近くに歩み寄ってきて「これ」と指差す。Sは開けてみせる。そのカップをYが進み出て動かそうとすると、Sは場を譲って自分は体一つ分下がる。Y「C君が当てて」というと、Cは目をつぶっている。SはCに体を近づけていき、Yの動かすカップの動きが見えないようにCがつぶっている目の上に自分の手を重ねる。YはSの目に手を持っていきSにも見ないようにいう。Sは自分の顔をCの頭に押し付けるようにして、二人で見ないようにしている。Yの「オッケー」の声で二人ともカップの方に身を乗り出し、それぞれ入っていると思うカップに手を置く。二人とも当たらず、Yは「これ」と残っているカップをひっくり返して見せ3人で笑い合う。

Sは、Yが関わって来てくれたことを契機にして、周囲に「誰が当てるか？」と少し大きな声で誘いかけている。Yとのやり取りが終わった直後であり、その呼びかけの様子からも近くにいたYというより、もっと他の子どもに向けられていたことが感じられた。そして、この呼びかけによってCがやってきて、早速指をさし、遊びに参加している。その後、Yが隠す側になって参加しようとする、Sは特にこだわりなく、そ

の場と主導権を譲り、お互いに遊びを楽しみあっている。

Sが思いついて始めた遊びが 近くにいる周囲の子どもに受け入れられる状況が見て取れる。この遊びが比較的単純で分かりやすい遊びでもあり、ちょっと楽しみたいと思うようなものであったことから、朝一番に何をしようかとやりとりをしたメンバーにいた子どもたちが関心を示し、関わりが始まったと言えるだろう。また、Sは自分が当てる側になるといった遊びの主導権をあっさりと相手に譲っており、その遊びを必ずしも主導的にやりたいというのではなく、誰かと一緒に遊びたかった思いが強いことが伺えた。やり取りをして遊んでいるSはとても楽しそうで、関わって遊びたいと思っていた自分の思いが実現できた体験となっていたと考えられる。

（4）一人になる（誰かと遊んでいきたいと思っているものの実現しない）

#### 事例5-4

Y、Cはカップの中身を当てる側や隠す側を一通りすると、自分が作ろうとしていた積み木に戻っていく。少しすると、Sは再び「誰か、これ当ててくださいーい」と少し大きな声で周りに言う。Yが寄ってきて立ったまま入っていると思う方のカップを足先で指す。当たらない。Cもやってきて同じように違うコップをさす。当たる。「今度はY」と座りながらYがカップを手にする。Sが目をつぶり、しばらくして「（目を開けて）いい？」と問いかけ、「いいよ」と言われてすぐに手にしたカップが当たる。「ピンポーン」とYが言う。その後、YもCも行ってしまう。

Sは、手元のカップを手にとって動かしたりもするが、視線は周囲へいつている。Aの様子を見てから製作コーナーへ行き、すぐに戻ってくると元の位置に座り、カップをトントンとしている。絶えず視線は周囲に向かっている。

Sの始めた遊びは、5歳児の子どもたちにとっていつときの楽しさはあるが、遊び続けていく手応えがあるというものでもない。そのため、一通りやり取りを楽しむと、Y、Cは自分が始めていた遊びに戻ってしまい、Sにとっては関わり（遊び）が続いていくことにはつながらない体験となった。

Sの呼びかけにYとCは今一度応えてくれてやりとりがなされるが、全く同じことの繰り返しとなっており（カップの数が増える等の新たなルールが加わるもない）、飽きてきていることが、Y、Cの遊び方が雑になっているところにも現れていた。

Y、Cは友達であるSが呼びかけているので、それに応えようとしている。こうした姿には、友達の思いを感じ、それに応える優しさやクラスの仲間意識の育ちがあることを感じさせられる。同時に、誘われた遊びに魅力を感じなくなりつつあることを、誘いかけたS自身もY、Cの様子から感じられているのだろう。それがYとCが行ってしまっ

てからは再度誘いかける行動をやめてしまったことや、周囲の様子をSがしきりと見始めた様子などからもうかがえる。

(5) 遊びを作り上げていく中で関わりが生まれる

事例5-5

〈クレーンを作る〉

Sはカップをトントンとしながら絶えず視線は周囲を見回している。少しすると、担任がSの後ろにやってきて、積み木を取り出し重ね始める。Sと担任の間で前日に見てきたクレーンについてのやりとりが始まりクレーン車を作っていくことになる。

しばらくして、クレーンの釣り上げる仕組み部分が少し形になってきたところで担任が抜けると、見ていたAがクレーンの先端部分を手にして、紙コップを引っ掛け「ギー、ガチャン(動かす擬音)」と言いながら動かし始める。Sは一緒になってそれを見始める。担任が筒を手に戻ってきて「いいの(筒)見つけちゃった」S「ああ、それかあ」と言いながら担任を見る。Aが担任の持ってきた筒の先から降ろすようにして先端を動かすと、S「でもさあ、それ下に…。テープでくっつけて…」と言う。担任「テープ…持ってこようか…」と言うと、Sは自分から取りに行く。担任「ここ、とめてもいい？」頷くS。A「どうやってやるの？」担任「どうやろうか？」S「かけてさあ、ちょきちょきって切って…」担任「だって。」とAに向かって声をかける。SとAは顔を寄せ合って相談する。担任「ここに紙をつなげて紐みたいにするってこと？」頷く二人。担任は「うん、やってみないとわからないから、やってみようか？」二人は製作コーナーへ行く。

遊び出せないでいるSの様子をしばらく見守っていた担任は、遊び出すきっかけになればとの願いから近くで積み木を積み、クレーンを作っていたとのことだった。クレーンの上げ下げする仕組みの部分ができ、一旦担任が離れたのを契機に、その場にいたAがそれを動かし始めたところから少しずつSとAの二人での取り組みが始まる。

Sは担任が持ってきた材料を見て、「くっつけたらいいのではないか」との自分の考えが出てきて、それを言葉にしている。そしてそれを逃さずに担任が「テープを持ってこようか…」と実際の動きを後押しすることでそのアイデアが形となっていつている。そして実際に形となってきたものを見て、Aから「それをどうやって動かすのか」という問いが発せられることになっている。やはりここでも、クレーン車といったものが少しずつ実際の形になることで、これから遊んでいこうとすることがお互いに伝わりあう状況であることが見えてくる。

また、材料を持ってきたのが担任であるので、Sの考えは担任に向けて話されることになった。また担任とSが二人で作っていた仕組みについてのAの問いかけに「どうやるか？」と言葉を発したのが担任であったこともあり、Sがその考えを話すのも担任に向かうことになった。担任は、二人が関わりあって作ってほしいとの願いを持っていたこともあり、「だって」とSの発言をAにつなぐように投げかけている。それによりSとAの二人でのやり取りが始まっていくことになった。担任の二人で関わってほしいとの意図がかなりダイレクトに伝えられ、またそれを二人が受け止めていることが読み取れる。またそうした働きかけでSとAがやりとりをすることはなっているが、ここでも担任の「やってみようか？」との後押しが実際の動きへとつながることになっている。

#### （6）友達と一緒に遊びに必要な材料を探す

##### 事例5-6

SとAは二人で材料を探す。言葉でのやりとりも少しあるが、材料を手にとってみては顔を見合わせている。少しして、Sは1枚の紙を手製コーナーに座り、ハサミで細く切り始める。Aが近くにやって来て見ている。そこにたまたま担任が製作コーナーにやってくると、Sは「こうやって…」と自分の切った紙を手製コーナーに繋ぐような仕草をして近くにきた担任に伝える。担任「ああ、つけてみるのね。うん、やってみないとわからないもんねえ」の言葉にSは頷き黙々と作業を続ける。Aは隣でSの様子を見ながら紙コップをいじって待っている。

二人は一緒に動き出しているが、言葉でのやり取りはほとんど見られず、どちらかといえば、アイデアを口にしたSが主になって動き、それをAがついて行って見ている状況であった。ここでも、Sらは言葉で自分の考えを十分に伝えることは難しく、動きや出来上がっていく過程を見ていることで、相手がやろうとしていることやその方向性がわかっていくといった状況にある。

この事例でも、言葉で伝えようとしている相手は担任である。ちょうど製作コーナーにやってきた担任に、自分のやろうとしていることを理解し認めてもらいたいとの思いもあるのだろう。ここでSによって言葉として発せられているのはわずかで、これからやろうと考えている主要な部分はほとんど動作で表されており、なかなか相手には伝わりにくいものであった。そうしたことに對し担任は、動作も含めて子どもの考えを的確に理解し、それを言葉化してくれる関わりが普段からなされていることが多いクラスであった。担任が、自分の考えをわかってくれようとする信頼できる大人だからこそ、この段階では言語化することが難しい内容についても担任には伝えようとする傾向があるのではないかと考えられた。

(7) 共に試し楽しむ

事例5-7

A、Sはクレーンの仕掛けのところに戻る。クレーンのアーム部分の動く仕組み部分の上げたり下げたりを繰り返したり、筒の中に紙の先端を入れてみたりして試す。

その後二人は製作コーナーに行き、材料を選んで戻って来ると、Aは自分の持ってきた紙を筒の先端に巻きつける。Sはそれを取り、筒のところで上げたり下げたりの動きをする。(笑顔で面白そうな感じ。)Cがやって来てその様子を見てると、S「あがりまーす」と言いながら、仕掛けを上げて見せる C「なんか〇〇みたい」。そこへその場を少し離れていたAが戻って来て、(何も言わず)釣り上げ部分に紙箱をつける。Sは「ウーン」と回転させる音を出しながら、筒部分を回転させる。Aはその様子を見てる。一周させたSはAに「おもしろーい」と笑顔で言う。反対回しで「ウーーン」と回転させ戻して行く。続けてSは「誰か、ここに(吊りあげ部分に)乗せてくださいーい」(と、Aを意識した感じで言う。Aが準備した箱を)「バックバッカー」「オーライオーライ」など言いながら釣り上げて「あがりましたー」と嬉しそうに言い、続いてクレーンを回転させる動きをする。

ここではクレーンがクレーンらしく動くような試行錯誤がなされている。どちらかというとならSは、動く仕組みが面白くてクレーンを中心となって動かしているが、Aも一緒に気持ちで試している状況であることが、Aの動きからも読み取れるだろう。Aは、クレーンで運ぶものが必要と考えて紙箱を持ってきて黙ってかけている。そこには言葉のやり取りはないが、共通のイメージを持つことができていることが窺える。

Aが箱を吊り下げてくれたことで、クレーンらしく物を運ぶ状況が実現できたことなどから、Sは「おもしろーい」と笑顔でAに語りかけている。Aもそれに対して笑顔を見せ、喜びを分かち合い、Sはさらに再度箱の荷物をかけてくれるようAに働きかけて、遊び進めようとしている。自分たちの考えていたことを実現させ、その遊びの面白さの中で気持ちが通いあうような瞬間であることが感じられた。

(8) 遊びに行き詰まり、自分の考えが思いつかず、友達に意見や考えを求める。

事例5-8

Sがクレーンを動かす中心となりながら釣り上げ部分をうまく動かせるようにする試行錯誤が続く。Sは紐を奥へと動かすと紙箱を上まで持ち上げ「はい、(とってAを見て) こうやって、どうすんの?」と言う。Aが「これを…」と言いかけると、Sは手を一旦離すが、Aは思いついたことがあるのか製作コーナーへ行

く。SはAが手を離れた棒を再度掴みそのままAの動きを目で追っている。Aは戻ってくると、紐と箱に手を出しながら「ねえ、これ貸して」と動かす部分を持つとうとする。Sは「なんでだよお、…なのに」という。AはSの持っている部分に手を伸ばしながら「一回だけ」と言う。Sは「なんでえ？」言いながらも吊り下げ部分から手を離す。Aが作業を行うのを（ちょっと不満そうに）見ながら S「それじゃあ、（荷物が）吊れないと思うよ」と言うが、それでも「ちょっと待って」と奥の方に紙紐自体を動かして（動きやすいようにして）やり、Aの動きを見ている「まだあ？」「それじゃあ吊れないと思うよ」。Aは黙々と自分の考えたことを形にしていくが、試してみると紐が落ちてしまう。Sは「ああ」と言い、「細くなっているからだよお」と、今度はSが紐を持ち始める。Aも手を出そうとするが、Sが主となって上に引っ張り上げるとAも手を添えて一緒に引っ張る。筒から紐がぬけることなく、上まで箱が積み上がると S「できたー」と大きな声で言う。

Sは荷物の吊りあげがうまくいかず、Aに意見を求めているが、動かすのは自分だと思っていたようであった。Aはそれに応えようとして材料を探しに行ったようだったので、材料を持ってきて自分が考えたことを試してみようとして「ねえ、これ貸して」と動かす部分を持つとしたのだと思われた。Aはもともと言葉数も多くはなく話す声も小さいが、よくものごとを考えていることが伝わってくる子どもである。自分の思いついたことが実際にどうであるか自分自身でさえも掴めないでいることに挑戦しようという時に、それを言語化して伝えるということはAにとっても難しいことであると考えられた。Aははっきりと「これ貸して」と伝え、渋るSに「1回だけ」と交渉している。どちらかといえば譲ることの多いAにしては珍しい姿である。遊びの中で生じた必要感が、実際に言葉にして交渉する姿へと繋がっているとと言えるだろう。

Sも口では「なんでだよ」などと言いながらも、一緒にやっているAの主張を受け入れている。Aの動きを見ながら、SはAのやろうとしていることを理解予測し、それではうまく釣りが上がらないことや、やってみた後でだが、その理由もなんとか言語化している。すでに過去に自分が試してみた体験があったことがうかがわれた。

好きな遊び（自由遊び）の場面においては、一方が思いついたことを試してみること、たとえそれが過去に自分が試してみたものであっても、その試しを受け入れていくような状況が、遊びを作り上げていく中では繰り返し出てくる。考えた方の子どもにしてみれば（この事例ではA）自分で考えてみたことを試してみたいと思うことが当然であり、実際にやってみて、納得もできるだろう。そうやって、子ども同士が納得しながら進めていくことになる体験を含むのが、自ら始めた遊びを作り上げていくということなのだということが見えてくる。

(9) 相手の思いや動きを受け入れる

事例5-9

二人での試行錯誤は続いている。Aは製作コーナーへ行くと、小さな輪を持ってきて紐の部分に通し始める。その様子を目にしたSが「待って。どうするの?」とAに言うがAは言葉では応えずそのまま紐に小さな輪を通していく。Sはその様子を見ている。Aは小さな輪を筒の上部分まで持っていき、先ほどと同じで紐の通りが悪くなってしまふ。S「何やってんだよお」。Aは小さな輪を紐から外すと再度製作コーナーへ行く。Sはあげさげを試す。Aはガムテープを手に戻ってくる。それを吊り下げ部分にAがつけ、Sが引き上げようとする。

Aは、先にも述べたように言葉数が多くはなく話す声も小さい子どもであるが、自分なりによく考えていて、Aのアイデアで問題が解決したり遊びが面白くなったりすることもあるので、Sも先の事例のようにAに意見を求めたりするところがある。ここでは、Sは「どうするの」と一度は制するが、Aがそれに言葉で答えずに黙々と試す作業を続けるのを、少し不満そうな表情をしながらであるが見ている。Aの落ち着いて黙々と作業を進めている様子からは、自分が本気で試してみようとするのをSは妨害するような相手ではないとのSへの信頼感のような思いがAの方でもあったように思われる。Aの試しは結果的に上手くいかず、Sは「何やってんだよお」と責めるようなことを口にするが、AもSもお互いに意に介することもなく、その後もSは上げ下げを試し、Aは次のものを持ってきてつけて試したりしている。ここでも自分の思いとは違う行動に出会っても、いったんは様子を見て相手の動きを受け入れていこうとする姿勢があること、また一緒に遊び進めていくにはそうしあっていかなければ、一緒に遊びを作り上げていくことが実現しないのだという体験になっていること読み取れる。

(10) 喜びを分かち合おうとする

事例5-10

担任がSやAがクレーンにつけていた箱(お菓子の箱)よりは少し大きな箱(ダンボール箱)を持ってきて「じゃあ、大きいもの。さあ、(クレーンで)あがるかなあ?」と言ってクレーンの近くに置く。

Sは箱を手に取り、「ああ、これはここかあ」と、クレーンのアームを引っ掛ける位置を探して言う。箱の隙間にクレーンのアームの先端を差し込み、クレーンのアームを上げていくための紐を持っているAのところに行き、Aが紐を持っているのとほぼ同じ位置でSも紐を握り引っ張り始める。だが、段ボール箱はアーム

ム的位置がよくないのか思うように吊りあげることができない。紐を掴んだまま S は立ち上がり、片手で段ボール箱がかかっているアーム部分の筒を押さえながら、掴んでいた紐を引っ張りあげてみる。するとダンボール箱が上まで持ち上がる。S は嬉しそうに「持てた」と言いながら A の方を見るが、A は違う方向に気を取られていた。S は「持てたよ、A くん」と少し大きな声で A に伝える。A がガムテープをつけて動かし始め、A が中間くらいまで吊り上げると、自分も手を添えて一緒にグッと引っ張る。その勢いでガムテープが外れるが二人で笑う。

担任が少し挑むような感じで持ってきた大きな箱をクレーンで吊り上げることができた喜びを、A の名前を大きな声で呼び伝えている S の様子から、一緒に仲間とできたことを喜び合おうとする気持ち強くあることが伝わってきた場面であった。担任の挑むような口調も、S と A が二人でその挑戦に向かおうとするような仲間意識を喚起させる働きがあったと思われる。この荷物の吊り上げの成功の後には、ガムテープで上手くいかない時にもその外れた様子に二人で笑いあっている姿が出て来ており、自分達で挑戦し取り組んでいることの楽しさが伝わってくるようであった。

#### (11) 遊びを終わらせ、どうするかを確認し合う

##### 事例5 - 11

S は箱に紐をかけ、箱が落ちないようにそっと持ち上げて箱を回転させ、上げ下ろしの台の上にその箱を下ろそうと試す。A が回り込んできてその箱の様子をみる。（その作業の途中で担任がクラス全体に片付けの時間であること告げる声が聞こえると、S はそちらの方に少し視線をやっていた。）

S はその動作が終わると、A に「とっておく？」と声をかける。A は S の顔を見つめたまますぐには何も言葉にしない。S はクレーンのアームにかかっていた箱を外し、アームの中にあった棒を外して片付け始める。A はその様子を見ていたが「これ（筒を触りながら）残しておこう」とはっきりした声で言う。S は筒の中から外そうとしていた棒をまた中に入れる。そのあと S は紙紐を折りたたもうとしているが思うようにいかないと「A くん」と（手伝ってという感じで）呼びかけ、一緒にダンボールの中に箱や紐を入れる。

S と A が一緒に遊びに取り組む相手としてお互いに認め合っていることが、この片付けの場面からも読み取れるだろう。まず S は共に遊んできた相手である A の思いを確かめようと言葉にして聞いている。A から答えが返ってこないため、S は自分の判断で解体して片付けていこうとしていたが A の言葉を聞いて元の状態に戻し、他の部分

の片付けに向かっている。片付けの場面でもお互いの思いを尊重していることが伝わってくる。また、Sには、相手の考えを聞こうとする姿勢やそれを言葉にしていこうという態度も育っていること、またAも時間が少しかかっているが、そのSの問いかけをしっかりと受け止め、自分の意見を伝える力が育っていることも見えてくる。

(12) 誘い合って遊びを始める

SとAは、6月には誘い合って遊びをスタートさせている姿があった。

事例6-1

〈ジェットコースター〉

Sは保育室の入り口付近で、大型積み木を運んだり並べたりしている。そこに登園してきたAが様子を見に来る。A「何してるの?」。S「昨日のジェットコースター作らんの?」とAに顔を近づけて言い、Sは積み木をさらに積み上げ始める。AはSの近くにいながら、Sの様子や保育室の中での他の子どもの様子を見ている。AがSの持ってきた大型積み木に座ると、S「ねーねー、座らないでよ」。言われたAは積み木から立ち上がる。Sはぶつぶつ呟きながら、ジェットコースターづくりを続ける。

しばらくすると、クラスのほとんどの子ども達が栽培しているスイカの様子を見にいった。Aは「みんな行ったから…」と何度かSを誘い、二人は連れ立って園庭へ行く。その後積み木のところに戻ってくると、Sは「ねえ、手伝って」とAに言う。Aが廊下の遊びの様子を見に行っただけで、後を追うようにSも見に行くが、廊下で遊ぶメンバーから「まだですよ。まだですよ。」と追いかえされる。AとSは微笑みを交わしながら積み木に戻る。SがAに「ねえ（積み木運びを要求するように）…。Aは積み木をもって移動し始める。Sは自分のイメージを伝えようと話し掛けるが、Aは耳を貸すというよりは考え込んでいる様子である。

SはAからの反応がないことと、廊下の遊びの様子も気になるようで廊下に向かって行く。Sの動きを追うようにAも廊下に行く。Aは廊下にある欠席者ボードが目にとまったようでそれを見始める。Sは廊下で遊ぶ仲間にもちょっかいをだしてと鬼ごっこのようにして楽しむ。Aは声を出しながら欠席者ボードを見ている。Sも欠席者ボードを覗き込むと、Aは微笑みながらSに話しかける。

その後AとSは保育室に戻るが、すぐにSが廊下に行こうとする。AはSに「そっちに戻るな」と声を掛け、Sを保育室に呼び寄せる。保育室に戻った2人は、積み木を積み上げ始める。積み木をはさんで2人は向き合って会話をしている。Sが立ち上がり廊下の遊びの様子を見に行く。Aも追って行く。AはSに「だから、そっ

ちの方に行くな」とSを積み木に呼び戻す。

しばらくして担任が様子を見に来る。担任が「どうした？」とAとSに声を掛けると、Aが「（一緒にジェットコースターを作っているメンバーに）お休みがいて…」。担任は「どうしたらいい？どうしたいの？」の言葉をかけると、Aは手で形を示し伝えている。その後AとSは積み木を取りに行く。Sは友達から積み木を譲り受けると、Aを呼び「こんなに沢山積み木が来たよ」という感じで、笑顔でAに伝える。Sは積み木を2個ずつ積み始める。

朝のスタートはそれぞれのペースで始まる。もう動き出しているSと、これから様子を見ながら動き出そうとするAはギクシャクするところもあるが、Aは他の場に行ったりはせずSの近くに留まっている。そしてクラスのほとんどの子ども達が園庭に出た際に、Aが何度も一緒にスイカを見に行こうと誘いかける様子や、Sがそれを受け入れて園庭に一緒に出かけていく様子等には、AとSが仲間であるとの思いがあることが読み取れる。何をして遊んだり活動したりするかということもあるが、それ以上に仲間と一緒に何かをしたいとの思いが強くなってきていると言えるだろう。

それは、Sが廊下の遊びに興味を持って見にいけばAも一緒に行くなど、行動を共にしようとする様子からも伝わってくる。Sが主導しているように見える場面も多いが、AがSに「そっちに行くな」と呼び戻す姿もあることにも表れているように、決して一方向的な関係性ではないことが感じられた。また、自分たちが使いたい積み木をSがたくさん譲り受けると、それをSはわざわざAを呼んで伝えて笑顔を見せるなど、二人で体験を重ね、思いを共有化して動くことができていることが感じられた。

### (13) お互いに考えていることを伝え合う

#### 事例6-2

Sはその後、牛乳パック（ジェットコースターのタワーになる）を繋いだものをいくつか持ってくる。S「よいっしょ」。それを見たAは「なんで1個なの？」。S「…だからだよ」。

Aは牛乳パックを持ちながらSに言葉を掛けると、Sは「これでしょう？」と言ってAに牛乳パックを差し出す。Aは差し出された牛乳パックを受け取り、自分が持っていた牛乳パックと繋げて積み木の上に乗っすぐ立てる。Sもその隣に、近くにあった牛乳パック（繋げたもの）を立て高さを比べる。S「これよか（Aに渡した牛乳パックの方が）高いでしょう？」など2人で会話をしながら進めている。

Sはガムテープで牛乳パックを繋げている。Aは製作コーナーから時折Sが作業

している様子を視線を向けながら、牛乳パックを手に何か考えている様子である。Aは牛乳パックと新聞紙を持って遊びの場に戻り、新聞紙を破り牛乳パックの中につめる（牛乳パックを立てた時に安定させるための工夫と思われる）。

Sは牛乳パックをガムテープで繋げ高くする。Aは牛乳パックの中に新聞紙を入れる。この作業がしばらく続いた。その後Sは製作コーナーに行き、牛乳パックと新聞紙を持ってくる。SもAと同様の作業、牛乳パックに新聞を詰め始める。

Aは新聞をつめた牛乳パックをガムテープでつなげ始める。Sは製作コーナーに行き、テープで牛乳パックの口を閉め、また遊びの場所に戻る。長く繋げた牛乳パックを2本、2人それぞれが立てて高さを確認している様子。ニコッと笑いながらAがSに言葉をかけ、牛乳パックについて会話する。

しばらく後、Aは2個積み上げた積み木の上にタワーを立てる。Sはテープを探して保育室を歩いて回り、ガムテープを手に持って遊びに戻る。Sは戻ってくると（担当が少し積み木を動かしたあとだった）「なんか、おかしい気がするな」「ねえーこれ、なーんかおかしい」「なーんか変だな」「こうじゃなかったよね」と言って積み木を並べ直す。Sは積み木に牛乳パックを立てるがうまくいかず「あれ」。S「ねえーAくん。そうじゃなかった?」。Aは「ここにおいたら」とSに言う。

遊びの方向性を共にしながら、その実現のために、それぞれが考えて動いていることが伝わってくる。そして、自分のことをしながらもSの動きに「なんで1個なの?」とAが疑問に感じたことを問いかけその理由をSが答えたり、高さについても確認しあったり等、自分たちが取り組んでいることを巡って言葉で伝え合う力もついてきていることがわかるだろう。

同時に、それぞれの動きを見ながら相手のやろうとしていることを理解するといった春の頃に頻繁にみられた姿も続いている。相手の動きを視野に入れており、製作コーナーでSの作業をみながら、どうしたらいいかを自分なりに考えるAの姿や、Aがやり始めたことが自分たちの実現していきたい方向性だと理解すると、Aと同様の牛乳パックに新聞紙を詰める作業を行なったSの姿などからも読み取ることができる。さらにこの時期になると、理解するだけでなく、それが自分達の遊びの目当てを實現していくものであればすぐに取り入れて同じように動いていくなど、実際に行動に移して自分達の遊びのめあての實現に向けてどんどん動く力が育ってきていることが窺える。二人が、お互いの力を認め合って、かけがいのない遊び仲間として共に遊びを創りあげている体験となっていることが感じられた。

Sの「かかわり体験」～7月、同じ活動に取り組む女兒達とかかわる姿を中心に～

7月には、SとAはそれぞれ違うグループで活動を展開している姿があった。

(14) 遊びでリーダーシップをとり自分の考えをグループのメンバーに伝えようとする  
事例7-1

〈プラネタリウムづくり〉

登園後、Sはプラネタリウムづくりに一緒に取り組んでいる女兒たちと共に自分たちの遊びの場に積み木を運び始める。Sは4個も重ねた大型積み木を押すようにしてもってくると「これ運んで来た」B子に話しかける。Bは「ここに座るの？」と笑いながら座ってみせる（子どもが座るのにちょうどいい高さであった）。Sは「違う違う違う」と言いながら「これこれこれ」と薄い板を運んで来て「これをのせるの」。そしてBに「これとって」と一番上の積み木をとるように言う。BはSの顔をどうすればいいのかという感じでみている。S「これをおろして」その言葉でBが一番上の積み木をおろすと、Sは「そう…」と薄い積み木の板を積み木置き場から運んで来ながら言い、Bのおろした積み木の上に薄い板をのせる。その様子を見ていたBは、残っていた2つの積み木の上の方も同じように降ろして「おろしたよー」と大きな声で（Sに向かって）言う。Sは作業を続ける。Sが再度積み木置き場から薄い板をもって来た時に、B子が積み木を動かしつつ「ここに…」というS「え、違うよ～」と言う。C子はSの様子を見ながら積み木を動かす。

プラネタリウム作りは継続して行われていた活動で、この日も土台の積み木を積み上げることから始まった。Sの中では積み木を運び始めた時からすでに組み上げ方についてはっきりとした考えがあったことが、迷いなくB子に答えている姿からも読み取れる。

また、一緒にプラネタリウム作りをしている女兒たちは、ここではSの考えを理解しようと、Sの発言や動きを見ながら動いていることが伝わってくる。Sが数人のグループの中で、リーダーシップをとり、周りに自分の考えを伝えていく体験となっている。その伝え方は、言葉として伝えるというよりは、主要部分については自分の動き（身体的表現）で伝えている状況であった。

(15) イメージしていることを形にしていく

事例7-2

担任が「もうちょっと前に出してもいい？」とプラネタリウムの積み木を動かして積む位置を調整する。動かされた位置で積み木をきれいに並べ直すS。窓際に置い

てあった板（屋根）を運んで来て、その屋根の板を載せられるように土台の積み木を黙々と並べていく。

しかし、思うようにその積み木がきちんと並ばずに「ずれるじゃん」とSが言う。その言葉にB子が「ずれる？」と聞き返す。Sは頷き「ずれる」と言い、向かい合っている積み木の調整をする動作をすると、B子も理解したようでその作業を見ている。他の所で積み木の倒れる大きな音がする。二人共そちらをみて作業が中断する。

しばらくして作業を再開し、積み木がきちんとあうように調整をつづけるS。「前にだしているだけだからね。」とそばにいるCに声をかける。Cが直前にやっていた積み木をたたく動作をまねて、自分も同じ場所で積み木をたたく。CがSに「二個つかう？」という、Sは積み木コーナーへ行って積み木をもってきて並べ、中の方のCをみる。

担任が少しであるがプラネタリウムの積み木の場所を移動した際にずれた積み木を黙々と並べ直したり、積み木置き場からどんどん積み木を運んできては調整しながら置いていくSの姿は、作っていくことに対するイメージがはっきりとしていることが感じられた。おそらく昨日まで共に作ってきたプラネタリウムのイメージが元になっているものと思われ、それはこの活動の参加メンバーの他の子どもの「いつもは4つなのに今日は…」との発言にも現れている。活動が継続することで、多くの言葉を交わさずとも参加メンバーの子どものイメージしているものが共通となっている。

ここでは積み木を運びきちんと調整するという作業を、特にSは黙々と熱心にやっていた。そうした作業の推進役だからこそ、いつもと違って、きちんと積み木が合わないことに気づき、それを同じ作業をしているメンバーに向けて発信し、動作や作業でその内容を伝え、それが相手にも伝わっている。遊びのリーダーシップをとりながら、自分のイメージや思いついたことを同じ遊びのグループのメンバーに知らせようとする姿勢や態度の育ちを感じさせられるし、そうした体験をすることができる機会となっている。

また、積み木の調整を再開させたSは、その近くで積み木を叩くことを思いついてやっているCに向けて「前に出しているだけだからね」と声掛け、Cの動きに同調した叩く動作を真似てコミュニケーションを図っている姿などには、相手の思いや遊びを尊重する態度やコミュニケーションを取ろうとする言葉の力や態度が育っていることが感じられる。

(16) 作業についてメンバーに問いかけ、考えを受け入れて動く

事例7-3

〈隙間なく積み木を並べる〉

Bが、並んでいる積み木を「1、2、3、4、5」と手を置きながら数え始める。Sはその様子を見ている。続けてBが「いつもは4つなのに、今日は…」とSらに話しかける。この子ども達が積んでいた積み木倒れ、担任が「あー、たいへん」と寄って行き「あーびっくりした。気をつけて。」「大丈夫かしらイモリさん（イモリの飼育ケースのあたりに積み木が倒れた）」と続ける担任。Sは、自分のいた場所を動かずに様子を見ている。落ち着くと、積み木をきちんとあわせる調整を女兒ら他のメンバーと再開する。

しばらくすると女兒3人は、隣で遊んでいるグループのところへ行き、積み木を借りる交渉を始める。相手に差し出された積み木ではなく、Dがこれがいいという感じで一つの積み木を指差す。Sは女兒達が交渉する様子を見ている。相手が積み木を貸してくれたので女兒らは「ありがとう」と積み木を持って移動を始め、Sも自分の居た場所に戻る。

Bが「なんで5個あるのー？」と気づいたように声を上げていると、Sはその近くに寄って行く。SはBの方をみながら「じゃあ、どうするのー？」と言う。Bが一方の壁の一つの積み木を外す。女兒3人で話し始める。

Sは他の遊びに目をやる。女兒達は一方の壁をいったん崩し始める。Sは移動しイモリを見る。「むし、はいつてます」などイモリの様子を女兒たちに向かっていい、さらにDの腕をたたいてイモリのほうをみるように伝える。Dは少し目を向けるが自分の作業に戻る。

新しい積み木と古い積み木にわけて、積み木を積み替える作業が始まる。Sは自分が積み立てていた壁の積み木をDに渡していく。S「ねえ、これ全部…」「わかなくなるよ」B「これも新しいよ」D「こうやったら倒れちゃうよ」Sは考えるような感じで動きを止める。

しばらくして、Bが両方の積み木の高さがあるかを手で測ろうとする。その様子を見たS「こう…」と、2つ立てた積み木の壁の高さを比べる同じしぐさをしながら。「なんか、こっちが高い気がする」

D 同じようなしぐさをして「同じような気がする」

S 手で高さをはかる動作。

S「ねえ、高さおんなじかな？」と両手ではかる動作。

B「新しいの（積み木）は倒れるし。」

D「ガムテープはる…」

S「積み木だからさあ、しょうがないでしょ」近くにあった積み木に腰掛ける。

プラネタリウム作りをしていたメンバーの女兒3人は、新しい積み木と古い積み木が混じっていることで、積み木がきちんと並ばないと考えたようであった。そこで隣で同じように積み木を使って遊んでいるグループのところに積み木の交換の交渉に行った。その女兒達の様子をSも関心を持って見ていた。ここまでSは黙々とプラネタリウムの土台を作ることをめざして動いてきていた。しかしその土台がズレてしまうことについて女兒達が積み木を変えることを思い付き動き始めた様子を目にしたSは、女兒達の考えをその交渉の様子から理解し、積み木の交換作業が始まると自分も一緒に動いていこうとする姿があった。また数の違いに気づいた相手に「どうするの」と問いかけて、友達の考えを聞こうとしている態度もあり、自分の考えを相手に伝えるだけでなく、友達の考えていることを理解しそれを受け入れて一緒に遊びを作り上げていく体験がなされていると言えるだろう。

女兒達は日頃からコミュニケーションをとっているメンバーでは思いついたこと（積み木の入れ替え）を共有し動き始めるが、3人で動いて行くことで精一杯でその考えをSに伝えようとするような動きは見られなかった。Sは他の遊びやイモリに一旦は関心を移すが、それでも動き出した女兒達の様子を見て、自分が最初に積み上げた積み木を崩して渡していくという交換作業に参加する行動を取っている。仲間と共に真っ暗になる（隙間の空いてない）プラネタリウムを作ろうというめあてを一つにして、協同して作り上げていこうとする気持ちの育ちや態度があることが見えてくる。しかしながら、Sにとっては自分の積んだ積み木を崩す作業（一からのやり直しとなる作業）にもあたり、また入れ替えをしても高さが同じになるのかとの疑問の思いを持っていることもその言葉の様子から感じられ、少しして積み木に腰掛けてしまっている姿からは、この作業や遊びへの関心が薄れていっている様子が窺えた。

(17) 友達のやっていることと自分の考えていることがずれていることを伝えようとする事例7-4

Sは廊下の遊びが気になり、窓をあけて（エアコンが入っているので窓が閉じられている）見始める。しばらく楽しそうに見たり、廊下の子もたちとやり取りをしてからプラネタリウムに戻ると、

S「ねえねえ、なんでこんなになってるの?」「やなんだけどお。」

C「…」 S「ここに穴とかあいてくるんじゃない?」 Bもその考えに同調するよ

うに「あし、はいれるけどさあ」（穴があいている）と言い、BとSは笑い合う。S「なんで、こうなってんだよお」とCへ言いながら、積み木を整える。Sが積み木を整えるために一方を押ししたことで、もう一方の積み木が倒れそうになる。Sは立ち上がって、倒れそうになっている積み木のところへいき、「これが曲がっているんだよ」と積み木をなおしながら言う。

積み木の壁の中にCと一緒に座り込むS。Bが「もってきました」とさっき足が入ってしまった空間をうめるような積み木をもってくる。Bが入れた積み木をSはたたくようにして整える。

廊下で行われている他の遊びを面白そうに見たりもするが、自分がプラネタリウム作りの一員であるとの思いがあるのか戻ってきている。そして、積み木の様子を見て穴が空いてくるのではないか（光が入って真っ暗のプラネタリウムにならないのではないか）との思いから自分の意見をメンバーに伝えようとしている。しかしながら言葉では十分に遊びを進めているメンバーに伝わったとは言えず、それで実際に積み木を直そうと自分でも少し動いてみるが、自分が手を加えたことで積み木が倒れそうになったこともあり、それを直したあとは、中に座り込んでいたCと一緒にになって積み木の中に座り始めてしまう。すでに、プラネタリウム作りを主に担って進めているのがBらに変わっており、Sには、今何を目当てにしているのかが見えにくく、自分がどう動いていけばいいのか見出せないでいるようであった。

(18) 活動メンバーの一員であるとの意識を持ち、どうすればいいかを考えあおうとする事例7-5

程なくプラネタリウムの屋根を補強する作業をしている担任の姿にBが気づき、そのことを他のメンバーにも伝える。4人全員（B、C、D、S）で担任のそばに行って屋根の作業を見始める。担任は「これのほうがいいかと思ったんだよねえ。」「みんな（Sらが壁を組立てていること）で頑張ってるからさあ。これ2本をこうやってつけようと思って」と子ども達に笑顔で話しかける。子ども達も笑顔で頷く。担任「じゃあ、そっちも頑張ってる」と積み木の壁の方を指差す。4人とも頷いて積み木の壁の方へ戻る。

S「みんなどうする？」と問いかける。女兒達が一方の壁について話し合っている。Sが積み木を大きな声で「1、2、3…」と数え始めると、女兒が積み木を整え始める。

4人でのやりとりが始まる。ガムテープで積み木をくっつけるような提案もなされるが、Sは「段ボール」がいいのではないかと主張する。S「（積み木）危な

いし」D「イモリにあたって固くないし。段ボールにしよう？」S「どうやってする？」。D「一番下は積み木。ちょっとだけ積み木をやれば」とSへ言う。

S「たいへんだもん」

B「つくるのたいへんでもつくらなきゃ。」

S「どうして…このままだったらOK…」

C「何日も何日もやればあ 」

B「何日も何日もかかってやれば…」

担任「何に困ってた？」

S「段ボールでここつくる…」

担任「ああ、やってみればいいよ」

D「たおれちゃう」

B「段ボールでやれば、倒れても…」

担任「うん、そうだねえ。あなたたち、そうやって考えられるんだね。」

女兒「うん」

担任「やってみようか」

女兒「うん」

B「じゃあ、やってみよう」

Sは、積んでいた積み木を降ろし始める。

担任「高い方がいいってこと？」女兒が頷き、「うんわかった」と廊下へ担任が段ボールを取りに出ていこうとする。女兒3人もついて出て行こうとする。

Sは、最後の積み木も倒す。その様子を見ている女兒3人（待っている感じ）。Sも急いで立ち上がると3人の後について行く。

プラネタリウム作りがなかなか形になっていかない状況にあったので、担任保育者はプラネタリウムの屋根の補強を始めたとのことだった。自分たちの活動を手伝おうとしている担任の存在や援助が、プラネタリウム作りから関心がそれようとしていたSやCにとっては、再度このメンバー皆でやっっていこうとする気持ちの立て直しのきっかけとなっていた。

Sは「みんなどうする？」と、メンバー全体に声をかけて話し合いを始めようとしているが、女兒達からの応えが得られないと、積み木の数を大きく数え始めることで女兒達の注意を集め、そこから話し合いを始めている。リーダーシップを取って関わろうとしているSの体験がある。そして、ダンボールはどうか、それはなぜか（危なくないから）といったように、これまでダンボールという素材に関わって経験してきたことを基にしながら、Sは言葉で自分の考えを伝えようとする姿勢も育っていることが見えて

くる。しかしながら、女兒達にはSの意見が十分に理解されたとはいえなかったこと、加えて「何日も…」といった方向へと話がずれたことなどから、アイデアをめぐる話の話し合いはそれほど深まらないままに、実際に試してみることを後押しする担任の援助によって、段ボールを取りに行くことになっていった。自分が積み上げた積み木を倒すSの姿は段ボールを使うことへの気持ちの区切りをつけるかのようであった。また、そのSを待つ女兒たちの姿にはメンバーの一員として認めていることがうかがえた。

(19) 進め方を調整し、考えを伝え合おうとする。

事例7-6

担任と一緒に段ボールを選び、一つの段ボールを切ることになる。「みんなでやろう」と持っていき4人それぞれに段ボールカッターを手にする。

D「一人がちょっと切って、一人がちょっと切って、一人がちょっと切ってってやれば」と切る動作と共に言う。

B「いいね」

C「ちょっと切って、ちょっと切って、ちょっと切って、ちょっと切ってなんだって」と歌うように言う。

S「じゃあ、(先に)切る人～?」、Dが手を上げる

B「じゃあ、Dちゃん、Cちゃん」と順番を確認し始めると、Cは手を横に振る。「じゃあ、Bちゃんが一番。Bちゃん、」と言い始めると、Dが「私が…」最後に切るのをSとCが望み、じゃんけんをして決める。Sが最後になる。

Bが段ボールをもち、「どこ切る?」と問いかける。Dが応える

S「順番どうなったの?」

D「順番に並んでる」

Dが、「1(Bを指差し)、2(自分を指差し)、3(Cを指差し) 4(Sを指差し)」と順番を確認する。

Bが少し切ると、S「いいよ、もう」「ちょび、ちょび、ちょびだから。」

B「いいよ」と次の順番のDに席を譲る。

Dも切り始めると「もういいよ」

B「はい、Cちゃん」とBはCを促す。

Dは切り終わってない部分を見て「いっぱい残りそうだな。Cちゃんこんくらいまで」と切る位置を手で示す。

Cが段ボールを切り始め、Bが切る位置で手を添えていると、刃先にBの手があることになる。

それを目にしたSは「危ないよう。手を切る」と強い調子で言う。Bは手を離す。女兒が「Sくんが最後まで切る」と言うと、Cのあとダンボールを最後までSが切る。B「切れた」とダンボールを開き始める。

D「こんなに高かったらさあ、先生も入れるんじゃない？」

B「ああ…こんなに高かったらさ、入れるよね」

B「こんなに高かったらさ、どうやって押さえる？ここに段ボール入れる？ねえ？」とDに向かって言う。

S「こんなに高かったら倒れてくるよお」と大きな声で言う。

B「こうやったら？」と積み木で押さえるようにすると

S「えー、…」

C「また、いっぱい積み木使うことになるじゃん」

S「これ（ダンボール）、わければいいじゃん。そうすればさあ、わけてはってさあ」

BはSに視線をあてるが、Sの行ったことには何も応えず、自分で考えた方法（段ボールを積み木で支える）で動き始める。段ボールを積み木で両方からはさみ、固定した後、上で支えている手を離すと、その部分の段ボールが折り畳まれてしまう。

C「中の方からだけやればいいんじゃない？」（中に当たる部分だけ積み木で押さえるということ）は4回くらい繰り返してB、Dに言うが、B、Dは他のことに気を取られていて（どこで切るかを相談している）返事はない。

Sは段ボールの間にカッターを挟み込み、手を離してもそのままになっていることをBらに伝えようとするが、他の花火遊びのコーナーで歓声が上がり、そちらへ4人とも視線がいく。Cは、そのまま座って、花火の遊びを見始める。少し作業がとまるが、BとDは、自分たちの遊びのほうへ意識を戻し、ガムテープを取りに行き、付ける作業を始める。S「ねえ、これ、倒れましたけど」Sの声でCも戻って来て、ガムテープを切り作業に参加し始める。ガムテープを順番に使いながら段ボールに貼る作業を続ける。（そこに担任が関わることになる事例が7-7）

プラネタリウムの壁作りは仕切り直しとなり、段ボールを切ることになった。切る順番を自分たちで決めあって、少しずつ切ればいいといった意見を出し合って調整しているのは5歳児らしい姿である。ここでもSは、「先に切る（切りたい）人～」と順番決めを行ったり、順番を確認するなど、リーダー的にその調整役を果たしている。また、刃先の危なさを自然に相手に伝える姿などもあり、自分だけではなくお互いの動きを十分に意識したかわりの姿勢の育ちや、グループで活動を進めていく力が育っていること、それらを発揮する体験となっていることが感じられる。また、そうやって活動を進めあっていく中で、お互いのあり方やかわり方を知り学ぶ機会や体験となっていると

言えるだろう。

ただ、遊びの本質的な部分についての話し合いである“これからどうやって段ボールを使っていくか”になると、言葉で考えを伝えあい、お互いが納得して活動を進めていくのは、まだ難しいことが読み取れるだろう。BとCは、ダンボールを積み木で挟むことで立てるという考えを口にしてはいるが、それではダンボールを使うようになった理由からは遠ざかる。Sの発言は、たくさんの積み木を使わなくてもいいように、また倒れても危なくないようにとの理由からダンボールを使うことになった経緯を踏まえている発言である。Cも同様に、中側だけ積み木で立てるという考えを口にしてはいるが、それがBとDに伝わっていたとは言い難い。結果として、Bらが先に行動を始めたことから、B達が考えた方法（両方から積み木で挟んでダンボールを立てる）で作業が始められた。この時期、新たなことに取り組むための「話し合う」という体験では、各々がなんとか言葉にしてはいても、その内容や考えが伝わり合わない側面も伴っていたり、また仮に伝わったとしても自分の考えたことを試してみたいとの思いの強さ等から、どちらか動き始めた子どもの方のやり方で活動が進んでいく体験をしている場合があることがここでも見えてくる。

(20) 一緒に遊び進めてはいるが、思うように進んでいないと感じる

事例7-7

担任「なんとかできそう？」S「でもなんか、ばらっばら」

担任は積み木にダンボールを貼付けている様子を見て、「こまったねえ。こうやって（貼付けると）こっち側に全部積み木があるもんねえ」（2回繰り返す）「そしたら、もうちょっと大きい段ボールにしてみる？」女兒らは「うん」と頷く。

担任「そうすると、こっち全部隠れるかなあ。あっちの（グループ）みたいな…（段ボールを）大きいのにしてみる？」頷く女兒ら。

担任「じゃあ、これをやめてえ。」といいながら、段ボールを張ってある積み木から剥ぐ。

Sもやって来てガムテープを剥ぐ手伝いを始める。ゴミ箱に捨てにいき、その脇に立っている（ぼおっとしている感じ）。虫かご置いてあるテーブルに行き、少し虫を見たあと、女兒達がカッターを持っている様子を見て、自分もカッターを手取る。

S「ねえ、段ボールやるんじゃないの？」「段ボール」

D「これを切らないで（箱に組立てた状態で）、これをどんどん積み重ねていけばいいんじゃない？」

B「いいねえ。これをどんどん積み重ねていくの？」

D 頷く Cは側にいてみている。Sは他の遊びに気を取られている。

担任が戻って来ると、今の考えを話す。そのタイミングでSも側にやってくる。担任「うーん、それをどんどん積み重ねて行くってこと？そうしてみる？」 頷く B、D 担任「いいよ」「ここまず戻す？」と切った段ボールをつなごうとしている女兒の手元を助ける。

S「テープ…」(Sの持っているのは布テープ) 担任は「そしたら、紙のテープがいいかもね。」とSの言葉のすぐあとのタイミングで言う。3人の女兒達はテープを取りに動き出す。

9時の登園後すぐに自分が並べた積み木の壁もなくなり、またダンボールで作り始めた壁も手がつけられたばかりで、ほとんど捗っていないまま約1時間が過ぎている状況だった。担任の問いかけに対するSの「ばらばら」の言葉は、プラネタリウム作りを朝からしているにも関わらず、何も作り上げられていない状況にあることをSが俯瞰的に捉え理解していることが伝わってくる。

B、Dがやり始めた作業は、担任の「積み木をたくさん使うことになる」との発言で、作り方を変えることになる。先ほどSが主張していたのと同じ内容であるが、この担任の言葉で女兒達は自分達がやりかけていた方法を諦め、貼ってあったガムテープも剥がすことになった。それでも担任が入って作業の進み方も早かったこと、また子どもの中から出てきた、ダンボールを切らずに立たせるというアイデアを担任が逃さず拾い上げ、それを試してみることになったことで、この活動の見通しが立つことになった。プラネタリウム作りの子ども達にとっては、何度目かのやり直しのような作業を、担任の関わりでなんとか実現させ、実際の形となっていくような動きが支えられた展開となった。Sは担任の作業を手伝ったりもするが、ぼうっと立って見ていたり、他の遊びに気を取られたりしており、この活動に集中している様子ではなかった。それでも担任が関わるタイミングで戻ってきて、担任と女兒らのやりとりを見て、やろうとしていることを理解して自分なりに「テープ」が必要と考え参加を続けようとしていっている。

## (21) 遊びの仲間に時折参加する

### 事例7-8

Dがガムテープを貼って、筒状になった段ボールを立てようとするがすぐにぺたんと倒れてしまう。

Cはその様子を見ていて「だったらこうやれば」と、向きを変えて立たせてみせる。

Dは自分の最初の方向で立たないかやってみるが、うまくいかない。

Cは「たたないならこうすれば」と再度向きをかえる。

Dは筒状になっていると、その上に積み重ならないといったことを動作で伝えている。

Sは廊下の遊びを見にいていて、戻ってきてCらが立てている箱の中をのぞいてみる。何を言うのでもなく、再度自分は廊下の遊びの様子を見に行く。女兒達は、段ボールの中に代わる代わる入ってみて、大きい（切っていない状態の）段ボールがいいのではないかとのことになる。ここでSも戻ってきて、4人で先生に許可を求め、廊下で段ボールを選ぶ。が、廊下での遊びの音が聞こえるとSの視線や意識はそちらの遊びへといく。それでも4人で段ボールをもって自分たちの遊びの場へ戻る。

S 段ボールを切ろうとするような感じでカッターを動かそうとする。

D「なんで？ 切らないんだよ」

女兒が段ボールを重ねる様子を見て、

S「ねえ、これこうじゃなくて」と言いながら、段ボールを動かそうとすると、やってきた担任がSの後ろから手を出し支える。

Sは手を引き、女兒達のやろうとすることの様子を見ている。

担任「これを柱にして支えるっていうこと？」と女兒の動きから言葉にする。

「うん」と頷く女兒たち

担任「あ、そういうことかー。それであれ（屋根）をのせるの？」

女兒ら「うん」

担任「あそっか、そういうことね。それでこれ（今もってきた段ボール）がいるわけね？」

女兒達は頷く。

担任「で、これ（別の段ボール）も上に重ねるの？」と、組立てた段ボールの上に載せようとしながら「たかくしたいんでしょう？ じゃあ、どうすればいいんだろうね？」

B「…」

S「ええ…」と同意できない感じを伝える。

（担任が場を離れざるを得なくなる）

S そばにあった積み木に座る。

Sは他の遊びに関心を持ち始め、自分の参加していたプラネタリウムの活動から意識が離れがちになっていることが読み取れる。それでもプラネタリウム作りのメンバーであるとの思いがあるのか、戻って来ては時折参加するので、壁作りをどうやって進めていくかを共有していない状況にあった。そのためカッターで段ボールを切ろうとして、

メンバーに止められてしまう。そこに担任が入り、Bらがダンボールの壁作りをどうやって進めていこうとしているかについての説明を女児達から担任が受ける形となり、それによってそばに居たSにも女児達の考えていたことが伝わったことと思われる。それについて黙って聞いていたSであるが、どうやって高くしていくかの話になった際に、Bの言っていることに同意できずに「ええ…」と思わず声が出た様子であった。しかし、そのタイミングで担任が離れたこともあり、Sは疲れているような感じでそばにあった積み木に座り、伝えることを諦めた様子であった。このような体験がなされていることにも留意していくことが大切である。

(22) グループのメンバーの考えが形になっていくのを体験する

事例7-9

担任が戻ってきて「ここまでがんばろう」とプラネタリウム作りに入る。段ボールを手に取り、「これ（邪魔になっているガムテープを）外せばいいの？」の担任の問いかけに頷く女児。

担任はガムテープをはがし、箱を組み立てながら進めて行く。「高くするにはどうすればいいの？」と問いかける。

女児たちの視線は段ボールへ行っているが、答えは返ってこない。

担任「どっち向きにする？ こっち向きでいい？」

D「こっち」と言いながら90度回転させる。

担任「ああ、そうね」「ああ、あっちも？」と別な段ボールを指差す。「あれもみんな閉じないとだね」

Sは、その場にはいるが、何も言わず、様子を見ている。

C「あとで、みんな（段ボールの口を）閉じないと…」

担任「うん」とDに言いながら箱を閉じる。「ここ閉じて」「よいしょ」と1つ目の箱の上に箱を重ねる。「おおっ！」

女児「高っ！」

担任「こんな感じ？ やったね」

D「うん」と大きな声で。

Sは、そばで見ている。

女児達は他の箱も組み立て始める。担任も手伝いガムテープをはり始める。どんどんテープが貼られて積み上がっていく様子に

S「はや！」

担任「くださーい」とガムテープの輪を女児から受け取る

担任「はい」と言って受け取ると「私切るから、どんどん貼ってくださいー」と言って、ガムテープを切り、女兒に渡し始める。その近くの積み木に腰掛けていたSも、ガムテープを切っている担任に手を指しだす。

Sもらったテープをもって脇に回って。自分がずっと持っていたガムテープをはる。  
(作業はどんどん続く。担任「これ貼ったらおわりね」等の声)

S「こっちも？」と声をかける。

担任「そっちもお。はい」とテープを切り、順番に待っていた女兒に破片を渡すと、Sの言っているところにC、Bがテープを貼る。

B「ここ、あいてるよ」気づき声を上げると、S「みんな、こっちも（貼って）」と、声をかける。テープを持っていたDがテープを貼るのを見ていて、S「オッケー」

担任「オッケー」と、声を合わせる。

Sはその箱を持ち上げて、二つの箱の上にさらに上に重ねようとするが、反対側の箱の口がよくとめられておらず、子ども達は再度ガムテープを貼って、一番上に重ねる

担任「じゃあ、私たちも…」と声をかけながら、どんどんとテープを切る。子ども達はどんどん貼る。Sは、周囲の遊びをみている、最後のタイミングでガムテープを1つ貼る。

女兒「やったー」

担任「やったー」(呼応して)

C「先生の頭 超えた（当たった）ような気がする…」

担任「ねえ、」

担任「いっぱい考えたね、今日はね」

4人で組立てられた段ボールを残しておくために窓際まで運ぶ。遊んでいた場に戻り、積み木のテープをはずし所定の場に戻す。

女兒たちが考えたやり方を担任が補いながら、ダンボールが積み上がって形作られていくのを見ていたSであったが、「たか！」とその気持ちを表した女兒の言葉の面白さに乗るように、今度はSが「はや！」と、作業の進展の早さに声をあげて、それを契機に動き出し、テープ貼りに参加していった。そして、テープがまだ貼られていない場所を発見したBの言葉に加えて「みんな、こっちも」とSが伝え、そのSの言葉に応じて他の参加メンバーが動いてくれたことで、Sも活動を作り上げていく一員としての居場所を再度得たようであった。このように自分の気持ちを立て直していくSの姿の中にも、協同して遊びを作り上げていこうとする5歳児としての姿勢の育ちを読み取ることができるだろう。Sにとっては、友達の考えたことが形になって作り上げられてい

く体験を共にすることで、他の人の意見を聞いたり、それを一緒になってやってみることで思わぬ面白さが実現されていくことの体験となっていたのではないかと考えられる。

#### IV. 総合考察

##### 1. 「人とのかかわり」の視点から

〈遊びへの興味関心と子ども同士のかかわり〉

Sの「かかわり」体験においてまず見えてきたのは、子ども自らが環境に関わって遊びを展開する時間において、友達と遊びたいの思いを持って“遊びたいこと”が調整できずに一緒に遊び出せないという体験(事例5-1)や、遊びに手応えのある展開がなく続かないことで一人になってしまう体験(事例5-4)もあることであった。やりたいことの内容をお互いに伝え合うことのできる「ことば」の育ちも影響するが、それ以上に、“遊びたいこと(遊びの内容)”への関心が「かかわり」に影響していることであった。

子ども自らが環境とかかわって“遊びたいこと”を見出し、それを実現していこうとすることは、一人ひとりの子どもの育ちにとって大切なことである。従って「かかわりの成立」だけに力点を置いて考えることには慎重である必要がある。事例を検討していくと、遊びたいことの違いから、一緒に遊び出してはいなくても、クラスの友達の関わりたい思いや遊びを受け入れてひととき一緒にその遊びを楽しんだり(事例5-2のY、S)、役割交代を行ったり(事例5-3)等、一緒に楽しもうとする仲間意識の育ちがあることが窺われた。ここには、お互いの“遊びたいこと”があり、それを尊重し合いながらも、相手の思いや遊んでいることに関心を寄せ、関わっている5歳児の育ちや体験のありようが見えてくる。

〈友達と遊びを作りあげていく過程でかかわりが活発になり深まっていく〉

好きな遊びの時間の多くを過ごす子どもAとの間では、遊びを自分たちで作上げ楽しんでいく過程で「かかわり」が活発になると共に深まっていることが見出された。遊びに必要な材料を一緒に探しに行ったり(事例5-6)、仕掛けの上げ下ろしを声を掛け合って試したり、楽しんだり(事例5-7)する体験が繰り返され、できた喜びをともに分かち合おうとすることへつながっていった(事例5-10)。そのプロセスにおいては、お互いの考えていることが違い、時に強い言葉となったり、気持ちをぶついたりもする(5-8)が、相手の考えを受け入れ(5-9)試し、それが実現することで喜びも大きくなっていく。そして遊び終わった後には遊びで使ったものをどうするか相談しあって遊びを終える(5-11)体験がある。

5歳児になると、そうした遊びは何日間も続くこととなり、翌日以降もその仲間関係が継続し、かかわり続けていくこととなる。遊びのめあてが共有化され、どうやったら自分たちの思い描いていることが実現できるか、お互いの動きを視野に入れ理解しながら、自

分の考えたことを試していく体験（事例6-1）がなされていく。お互いの考えていることややってみようとする姿勢を、お互いに認め合っている関係性、お互いが遊び進めていくことに対する信頼感のようなものが、かかわりの中で育ち、体験されている（事例6-2）と思われた。こうしたかかわりにおける質的な深まりは、自らかかわりたいと思う相手とやりたいと思う遊びが見つかり、それを作り楽しんでいこうとする中で体験されるものだと考えられた。

〈活動に共に取り組む中で多様なかかわりに出会い、相手とのかかわり方を試行錯誤する〉

また、1学期中にSはクラスの別のメンバーと共に遊び進めていく体験もしていた。プラネタリウム作りをしたいということで集まったのがSと3人の女兒であったことから、これまで一緒に遊びを作り進めていくことの少なかった女兒との「かかわり」が展開されることになった。その中では、自分のやっていることや考えていることを伝えよう（事例7-1）としていたが、身体的表現で表される部分もまだ多く、自分の作業を黙々と進めて自分のイメージしているものを実際に形にしていく姿（7-2）でメンバーにSのイメージが伝わっていったのは、Aと遊び進めていた時と共通性があった。それでも、遊びのメンバーがSを含め4人であったこともあり、Sがリーダーシップをとって、作業の手順について問いかけたり（7-3）、進め方を調整したり（7-6）、考えが違うことを伝えようとしたり（7-4）考え合おうとする（7-5）体験がなされていた。しかし、考えの違いが思うように伝えられなかったり、同じグループのメンバーの進めていく方向性の違いがあったことで、遊びからの関心がそれてしまい、そのグループのメンバーと一緒にあって積極的に遊び進めることへの気力が続かなくなった体験もしている。それでも、自分もその遊びの一員であるとの意識や思いは育っており、プラネタリウムの活動の場に戻ってきては参加し、仲間の意見をもとに共に作り上げる体験をすることになっていた。かかわりの視点から考えると、あまり一緒に遊ぶことの少なかったメンバーが、ある一つの遊び（プラネタリウム作り）に関心を持ち、そこでコミュニケーションをとりながら遊び進めていく体験をすることができていることに意味があるのだと考えられる。遊びへの興味関心が似ていて一緒に遊ぶことの多い子どもだけでなく、多様なかかわりの機会が得られる保育環境であることが大切であると考えられた。

## 2. 「ことば」の育ちの視点から

〈動きを伴って伝わり合う子どもの言葉〉

「ことば」の力の育ちは、子ども同士のかかわりにおいても影響する。Sを含む子どもたちは、自分の遊びたいことを言葉でもやりとりしようとはしているのだが、何をどのように遊んでいくかといったことを言葉で相手に伝えるように話すことが、この時期では容

易ではないことが見出された(事例5-1)。

子ども同士のやりとりの中で、“これからやりたいこと”や“やっていこうとすること”がどのように伝わりあっているか検討すると、具体的な物や動きとして表現されること、すなわち遊んでみる(事例5-2:カップで隠す動作をする)、作ってみる(事例5-6:アイデアを口にしたSが主になって動き、遊びに必要なものが出来上がっていく過程を見ていることで、相手がやろうとしていることやその方向性がわかっていく)、実際の動きとして試してみる(事例5-8:A)ことが表現となり、それが周囲の子どもに伝わり、理解されることになっていた。自分でも初めてやってみることであれば、実際にやってみなければ自分でも予想がつかず、ましてそれを言葉で表現することは難しいことであろう。しかしながら、そうした思いつきを試したり、考えてみたりすることこそが、自ら環境に関わって展開する遊びの中では重要な体験である。言葉で表現し合うことを急ぐのではなく、試行錯誤しながら子ども同士で遊びを作り上げていく体験そのものが大切であると考えられた。

また、大人(担任)には、子どもが自分の思いついたアイデアやこれからやろうとすることを伝えようとする姿も見られた。自分の思っていることを汲んで理解し、時には言葉で表すことを助けてくれる担任だからこそ、そうした姿が出てくることに留意することも必要だろう。子ども同士の伝え合いを言葉化していくことは保育者の大切な援助の一つでもあり(事例5-5)、そうした関わりの中で子どもが言葉で伝えていく力を身につけていくことになると考える。

#### 〈遊びの発展の中で出てくるお互いの思考を促す言葉〉

子どもは自分たちの遊びに面白さが増すと「おもしろーい」「やったー」といったような自分の気持ちが表される言葉が交わされるようになる。そして、その面白さに支えられるようにして、遊びにより工夫を凝らしていくようになり、子どもから発せられる言葉も、「～～みたい」といったものや「どうやって動かすのか」といった、自分の発見したことや相手の考えを問いかけたりする言葉が出てくるようになり、お互いに考え合うことにつながる体験がなされていることも見えてきた。

また、子ども自身が十分体験したり過去に経験があることについては言葉にしていくことができていること見出された。Sの姿の中にも、自分が以前に経験した遊びや素材であれば、見通しを持って俯瞰して言語化されることに繋がっている姿(事例5-2)が見られている。自分が考えたことについても、過去の経験から考えて伝えたり(事例5-8)、どうしてそう考えたのかを言葉で相手に説明しようとする姿が見られており、友達とのかかわりの中での必要感から言葉にしていく体験がなされているものと考えられた。

## 引用文献

- i 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について．（2010）文部科学省．
- ii 幼稚園教育要領（2017年告示）
- iii 幼稚園教育要領（2017年告示）第2章 ねらい及び内容

